

アクラシアに関する哲学的な思考の歴史は、その存在を否定することから開始された。ソクラテスが「自ら進んで悪をなすものはいない」と宣言したとき、彼は最善の判断に背く自由な行為の可能性を否定したのである。何ものにも束縛されておらず、心身ともに健全で、自由に自分の好きな行為を選べるなら、行為の時点での最善の判断に従って我々は行為する。この合理主義的な前提こそ、アクラシアの存在にもまして哲学者が死守すべきものではないか。アクラシアの懐疑論、その存在を否定しようとする試みは、従来アクラシアの典型的なケースとして分類されてきた現象。自ら否定的な見解を抱いている自堕落な悪癖(bad habits)に耽ること。を、むしろ行為の時点での最善の判断に従う行為事例として解釈しようとするだろう。そしてソクラテスのような見解は、その現代版にも事欠かない。この提題では、ソクラテスと同型の思考の論理を示しているアクラシアに関する議論の射程を検討し、果たしてそれは奏功するか、本来の意味でのアクラシアはその存在可能性を確保できるかどうかを見定めていきたい。